

世界を舞台に生き抜く力を。 サレジアン国際学園の 「21世紀型教育」



新時代の
一貫教育
vol.4

～小学生子育てママさんライターの私立学校見聞記～

東京都北区赤羽台の高台に佇む**サレジアン国際学園小学校**。

80年の伝統を持つ星美学園小学校から、2026年度に校名を新たに今の姿へと生まれ変わり、近年注目を集める21世紀型教育を積極的に取り入れています。

今回は、真のバイリンガル育成に挑む、新設のインターナショナルクラスの授業と、学園のグローバル教育の姿をレポートします。

サレジアン国際学園小学校が
選ばれる

5つの理由

★1 カトリックの 建学精神に基づく 「心の教育」

理性・宗教・愛情を基盤に、自分も他者も幸せにできる力を育む「心の教育」が学びの土台です。聖ヨハネ・ボスコが実践した予防教育法による全人間教育の精神を受け継ぎ、知・徳・体のバランスのとれた人間形成を目指します。

★2 グローバル教育と 日本の卒業資格、 両方を叶える一条校

文部科学省が定める学習指導要領に基づく正規の小学校（一条校）です。インターナショナルスクールとは異なり、正規の教育課程を修了できるため、国内外問わず進路の選択肢を広げながらグローバル教育を受けられます。

★3 英語で“生活”する イメージ環境

授業はもちろん、ホームルームや行事、先生との日常会話も英語で行われます。英語を「学ぶ」だけでなく、英語で「生活する」環境の中で、実践的なコミュニケーション力を育みます。

★4 英語経験ゼロからでも安心の 2グループ制

入学前の英語経験に応じて、SG(Standard Group)とAG(Advanced Group)の2つのグループに分かれて授業が行われます(2027年度～)。スタートの環境は異なりますが、卒業時には等しく高い英語運用力の獲得を目指します。

★5 発達段階に応じた 21世紀型 STEAM 教育

心理学者ジャン・ピアジェの認知発達理論に基づき、学年ごとに最適なカリキュラムを設計しています。シンガポールやオーストラリアの教科書を使用し、プロジェクト型学習や教科横断型の探究の授業「iTime」を通じて、論理的・創造的な思考力を育てます。



1

2

3

5

- 1 豊かな国際性と温かい愛情で、子どもたちの成長を支えるインターナショナルティーチャーズ。
- 2 休み時間の一コマ。副校長の久保先生の周りに笑顔で集まる子どもたちの姿からは、学校全体のフランクでアットホームな空気が伝わってきます。
- 3 算数は、課題解決力を高めるシンガポールのテキストを採用。英語で論理的思考力を養います。
- 4 「All English」の環境の中、英語に触れ続けながら思考を深める時間。一字一字、真剣な眼差しで英語の文字を追います。
- 5 毎月の誕生日会をはじめ、インターナショナルクラスならではのイベントや行事も充実しています。

楽しいから、夢中になる。 英語の世界に溶け込む子どもたち

校舎に足を踏み入れ、1年生のインターナショナルクラスの教室へ向かうと、そこには活気にあふれた世界が広がっていました。見学したのは、ネイティブ教員が担当する英語による授業。驚かされたのは、サレジアン国際学園小学校としての記念すべき第1期生である1年生たちが、ごく自然に英語の環境に溶け込んでいる姿です。

前方の大きなスクリーンに映し出されたカラフルなアニメーション。それに合わせて、子どもたちは体全体を使ってリズムをとりながら、楽しそうに英語の歌を歌っています。楽しいから、もっと知りたい、もっと参加したい。子どもたちの表情からは、そんな純粋な好奇心が感じ取れます。何より印象的だったのは、その集中力です。40分間の授業中、最初から最後まで先生の言葉やスクリーンの動きに釘づけになっています。学びを単なる知識の詰め込みにするのではなく、子どもたちの五感を刺激する探究の場として構築されているからこそ、これほどの高い集中力が生まれるのでしょう。

グローバルな心と、 自分を律する力を同時に育てる

心に残ったのは、廊下ですれ違った際の子どもたちの人懐っこさです。「Hello!」と満面の笑みで駆け寄ってきて、自然にハイタッチを求めてくる姿からは、国籍や年齢の垣

根を感じません。このオープンで物怖じしない姿勢こそ、多様な環境に身を置くサレジアン国際学園小学校インターナショナルクラスの児童ならではの特徴でしょう。

一方で、インターナショナルな環境でありながら、しっかりとした規律が根づいている点も印象的です。例えば授業終了の合図があると、子どもたちは一斉に自ら机を整理させ、帰り支度を始めました。一人ひとりが、今すべきことを理解し、自律的に行動しているのです。

同校が目指すのは、単に英語が話せるだけでなく、自ら考え行動できる「21世紀型スキル」の育成だといいます。真の自由の土台として、他者を尊重し自分を律する規律を大切に。グローバルな視野と、日本ならではの教育文化が見事に融合していると感じました。

1日の終わりのリフレクションが、 明日への意欲を生み出す

授業後のホームルームでも、同校らしい取り組みを目にすることができました。1日の終わりに必ず行われる「リフレクション（振り返り）」の時間です。子どもたちは今日1日を振り返り、「自分が頑張ったこと」や「友だちのすてきだったところ」を言葉にして共有し合います。単に「楽しかった」で終わらせず、自分の行動を言語化するこの時間は、自身を客観的に捉える力を育むうえで、大切な習慣だといえそうです。

この会のハイライトが「賞状」の贈呈です。その日に素晴らしい主体性や思いやりを見せた児童に、先生から特別

な賞状が手渡されます。名前を呼ばれた子は照れくさそうにしながらも、誇らしげな表情で賞状を受け取っていました。そして印象的だったのは、周りの子どもたちからも自然と大きな拍手が沸き起こったことです。他者の頑張りを認め、仲間の喜びを自分のことのように喜ぶ。そんな温かな空気が、教室いっぱいに広がっていました。

科目の点数といった認知能力だけでなく、「挑戦したこと」「親切にできたこと」といった非認知能力を学校全体で価値づけ、称える。この丁寧な承認の積み重ねが、子どもたちの自己肯定感を高め、「明日もまた頑張ろう」という意欲へとつながっているのだと、強く実感した場面でした。

日本語を排除しない ALL English. 時と場合に応じて言葉を使い分ける柔軟さ

同校のインターナショナルクラスが提供するの、徹底した ALL English の環境です。しかしそれは、“日本語を厳格に排除した空間”を意味するものではありません。目指すのは、深い思考力の上に英語・日本語両言語での豊かな表現力を積み重ねる「真のバイリンガル教育」、そして「21 世紀に活躍できる世界市民力の育成」です。

実際、入学時点で英語にまったく触れたことがない子どもも少なくないといいます。「授業についていけないだろうか」と不安を抱える保護者もいるかもしれませんが、言葉が分からなくても、絵やジェスチャー、周りの友だちや先生の温かいサポートがあるため、子どもたちは不安よりも先に好奇心を覚えるようです。



お互いの頑張りを認め合い、称え合うサレジアン文化。表彰される仲間を我がことのように喜び、拍手を送ります。

驚くべきは、子どもたちの柔軟な適応力。入学からわずか数か月ながら、すでに相手や時と場合に応じて、日本語と英語を自発的に使い分ける姿が見られるといいます。言語の壁を恐れず、むしろ新しい言葉を覚えることを、まるで遊びの延長のように楽しんでいる。そんなエネルギーが満ちていました。

現在 2 クラスで展開しているインターナショナルクラスは、2027 年度からは英語経験に応じた SG (Standard Group)・AG (Advanced Group) の 2 グループ制へと移行し、さらなる教育の充実が図られる予定です。一人ひとりの習熟度に寄り添いながら、常に進化を続けるサレジアン国際学園小学校。今回の授業見学では、単なる語学の早期教育を超えた同校ならではの「心の教育」が、日々の授業の中に自然と息づいている姿を目の当たりにしました。

英語はゴールではない。 サレジアン国際学園小学校が育む真の人間力

広尾学園や三田国際科学学園など、数々の学校の改革を成功させてきた学園長の大橋清貴先生。アメリカの校長免許を持ち、現地の教育現場やカリキュラムデザインを熟知する教頭のカレブ・ライナード先生。そして、これまで複数の私学で国際教育の立ち上げに携わり、学校変革を牽引してきた副校長の久保敦先生。改革のプロたちの強力なタッグによってスタートした「インターナショナルクラス」設立の背景から、子どもたちが社会へ羽ばたく未来までを見据えた教育のあり方についてお話をうかがいました。

急増するプリスクール生の受け皿に。 インターナショナル教育を行う意義

—— 近年は英語教育に力を入れる学校が増えています。このタイミングで「インターナショナルクラス」を設立された背景には、どのような思いがあったのでしょうか。

久保先生：大きく 2 つの理由があります。1 つは、近年、首都圏を中心にプリスクールに通うお子さんが急増している現状です。英語環境で育った子どもたちが、その学びを継続できる「一条校(学校教育法第 1 条に定められた学校)」

の受け皿は国内に一握りしかありません。株式会社などによるスクールは多くありますが、「日本の義務教育を修了し、確かな学力を保証できる環境の中に本格的なインターナショナルクラスを作ろう」それが学園長の強い思いでした。

もう 1 つは、「中学校からでは遅い」という危機感です。



副校長の久保敦先生。子どもたちにフレンドリーに寄り添いながら、新しい時代のインターナショナル教育を牽引します。

Interview

本学園の中高では、すでに「21 世紀に活躍できる世界市民の育成」を掲げ、主体的に行動できる人間を育てる教育を実践してきました。しかし、このマインドを真に根づかせるためには、小学校の 6 年間で合わせた 12 年間の教育が必要不可欠であると確信したのです。

—— 実際にスタートしてみて、手応えはいかがですか？
1 期生のみなさんの様子を教えてください。

久保先生：おかげさまで、当初の募集定員を上回るご入学者を迎え、素晴らしいスタートを切ることができました。在籍生はプリスクール出身が約 8 割、帰国生・日本語幼稚園出身がそれぞれ約 1 割ずつという構成です。

なかには入学時にほとんど英語を話せなかったお子さんもありますが、子どもたちの吸収力には本当に驚かされます。まずはリスニング力がぐんぐん伸びていき、入学からわずか数か月で、もう自然と英語の環境に溶け込んでいます。

—— それは素晴らしいですね！ご家庭からの反響や、学校の雰囲気はいかがですか。

久保先生：保護者の方々の熱量には、本当に感謝しています。共働きのご家庭が多い中、驚くほどたくさんの方が自発的に手を挙げてくださり、父母の会の役員が次々と決まっていきました。「一緒に新しい学校を作っていきたい」という並々ならぬ思いを持ってくださっていて、私たち教員にとっても、とても心強いパートナーだと感じています。

単に「英語が話せる子」を 育てたいわけではない。 根底にある教育哲学とは

—— ライナード先生がこの小学校の教育で、最も大切にされている考え方は何でしょうか。

ライナード先生：私が子どもたちに最も育ててほしいのは、目の前の事象に対して「なぜだろう」と考え、仮説を立てて検証していく力です。この科学的なものの見方や論理的思考力を養うために、本校では独自の教科横断型探究学習「iTime」を取り入れています。1 人の教員がマルチに指導できる小学校だからこそ、あらゆる科目を自然に、縦横無尽にくっつけることができるのです。

—— 具体的にはどのような授業が行われているのですか？

ライナード先生：先日も「花」という一つのテーマをフックにした授業を行いました。まず英語の絵本の読み聞かせから入り（文学・英語）、そこから「植物が育つには何が必要か」を問いかけ（理科）、実際に紙で花を作って（図工）、さらにプランターに土を入れ種を植えて観察する（理科）というアプローチをしました。

一つのテーマから文学、工作、理科へと学びがドミノ倒しのように広がっていく中で、子どもたちは 1 年生の段階から、自然と「予想し、実践し、振り返る」というプロセスを体感していきます。

私たちが目指しているのは、単に「英語が話せる子」を育てるものではありません。英語はあくまでもツールに過ぎず、重要なのはそれを使って「何を考え、どう行動するか」です。AI がどれだけ進化しても通用する本質的な思考力を、この教科横断の学びを通して身につけてほしいと願っています。

—— 時代が変わっても揺るがない軸、ということですね。

ライナード先生：実は先日、世界各国のサレジアン・シスターズが集まる国際研修に参加してきたのですが、私たちの創立者が提唱した教育法は、今の時代にも、そしてこれからの未来にも通じる普遍的な軸を持っているとあらためて確信しました。この揺るぎない教育理念という土台の上に、21 世紀型の最先端教育を融合させていくこと。これこそが、私たちの果たすべき使命だと考えています。

「どうすれば解決できる？」の 問いから始まる。 知識を知恵に変える、 課題解決型のアプローチ

—— 「iTime」で培った思考のプロセスが、各教科の学びの土台になるのですね。

ライナード先生：その通りです。ベースとなる思考力が育っているからこそ、各教科で本格的なプロジェクト型学習を展開できます。

一例として、本校の算数では、世界的に評価の高いシンガポールの教科書を導入しています。「考える」を重視したこの教科書では、計算を単なる数式としてではなく、日常の具体的なシチュエーションに落とし込んで学んでいきます。

例えば、引き算の学習の

際にも、単に「7 - 3 = 4」と計算させるのではありません。「7 つのパイナップルを使って、引き算のストーリーを作りましょう」といった問いが出されます。子どもたちは、数学的な知識を現実の事象に当てはめながら自分の頭で考え、それを英語で表現しなければなりません。これにより、英語力と思考力が同時に、爆発的に伸びていくのです。



教室の空間デザインのアイデア出しにも関わった教頭のカレブ・ライナード先生。こだわりが詰まった環境の中、英語でののびやかな学びをサポートします。

久保先生：日本の従来の算数教育は、どうしても解き方を覚えるだけの作業になりがちですね。しかし本来、数学とは、ライナード先生が言ったような目の前にあるリアルな問題を解決するための学問であるはずです。

だからこそ、本校の授業の最初には必ず、子どもたちがワクワクするような「問い」を立てます。「どうすれば解決できるんだろう？」という強いモチベーションが生まれたうえで学びへと進むため、知識がただの暗記にとどまらず、子どもたちの頭の中に自分で考えた知恵として定着していくのだと思います。

日本語の「探究」から、段階的に英語の学びへ。多彩な背景を受け入れる、SGクラスの狙い

—— 2027年度から導入される「SG (Standard Group)」クラスですが、入学時の英語経験を問わない形にされるのには、どのような思いがあるのでしょうか。

ライナード先生：入学前の環境や背景がどうであれ、どんな子どもにも「世界で堂々と活躍できる力」を身につけてほしい。私たちの教育の門戸をより広く開き、多くの子どもたちの可能性を開花させたいとの思いから、SGクラスを開設することを決めました。

久保先生：本校が誇るカリキュラムがあれば、英語経験がゼロからの挑戦であっても、小学校を卒業する頃にはAGクラスの子どもたちと等しく高い英語力と思考力を獲得できると考えています。

まずは日本語による探究学習を土台にしながら思考力の基礎をしっかりと固め、段階的に英語環境へと移行していく緻密な仕組みを整えています。実際に、SGクラスでスタートした子どもたちも、1～2年でAGクラスへ合流していくことを想定しています。スタート地点は異なっても、目指すゴールは同じです。



いつでも英語の本を手にとれる環境が、子どもたちの「本好き」を後押し。各クラスに置かれた約450冊の中から、今日もお気に入りの世界を見つけ出します。



インターナショナルクラスに合わせた特別な教室。創造力を刺激するデザインや、自然と会話が生まれる自由な机の配置が魅力です。

—— 志願者数も初年度から大きく伸び、大きな注目を集めているサレジアン国際学園小学校インターナショナルクラスですが、今後の展望をお聞かせください。

ライナード先生：開設発表からの短い期間で、これほど多くのご家庭に関心を持っていただけたことは大きな喜びであり、同時に身が引き締まる思いです。実際に、本格的なインターナショナル教育を行う一条校は非常に稀少であることもあり、本校周辺のエリアだけでなく、都心部からも多くの子どもたちが通ってくれています。それだけ保護者のみなさまからの期待と熱量を感じますし、その信頼に全力で応えていかなければなりません。

久保先生：今の子どもたちが社会の第一線に出る頃、世界は今とはまったく違う姿になっているはず。かつてのように世界を席巻する企業やイノベーションが日本から再び生まれるようになるためには、時代の先を見据えた「新しい教育」へと、今こそ舵を切らなければなりません。

サレジアン国際学園小学校インターナショナルクラスから、未来の世界をより良い方向へと導く真のリーダー、そして世界市民を輩出していく。その強い覚悟を持って、これから子どもたち一人ひとりと真剣に向き合っていきます。



先生は「答え」を提供するのではなく、問いかけによって子どもたちの主体性を引き出します。

12年間のリレーで花開く、世界基準の「思考力」と「行動力」

サレジアン国際学園小学校のインターナショナルクラスは、同じ敷地内にあるサレジアン国際学園中学校・高等学校への内部進学制度を持つ、小中高併設の国際教育環境です。共通したビジョンのもとで途切れることなく学び続けられる、同学園の教育のつながりをご紹介します。



同学園の進路指導の根底にあるのは、「生涯のキャリアを見据えて進路を選ぶこと」です。小学生校で芽吹いた「自分で考え、行動する力」は、12年間という時間の中で、世界を舞台に戦える強さへと昇華していくでしょう。

「なぜ？」を問い続ける姿勢が、中高の高度なPBL型授業へと直結する

サレジアン国際学園中学校・高等学校では、すべての教科において正解のない課題に向き合う「PBL型授業」が導入されています。この高度な学びのスムーズな入り口となっているのが、小学校から実践されている教科横断型探究学習「iTime」やSTEAM教育です。

幼少期から「自ら考え、表現する」環境に身を置くことで、主体的に物事を深く考える姿勢が自然と身につくでしょう。小学校での学びの経験が、中高での本格的な探究学習へと確実につながっていく様子が、そのカリキュラムからもしっかりと伝わってきます。

小学校で芽生えた「英語が楽しい」の気持ちを、生涯の武器へ高める

小学校のインターナショナルクラスで培った生きた英語力は、中学・高等学校のAGクラスへ、そのままスムーズに引き継がれます。

同校の特色として特に目を引くのが、その高い目標設定です。AGクラスでは中学卒業時にCEFR C1（英検1級相当）以上を、高校卒業時には最高峰のC2の獲得を目指します。単なる語学の習得にとどまらず、英語で世界の課題を議論できる真の国際人を育むための環境が整っていることがわかります。

世界も視野に収める12年間の先にある、自分らしいキャリアの選択

サレジアン国際学園高等学校では、日本の卒業資格と同時にオーストラリアの高校卒業資格（WACE）を取得できるDDP（デュアル・ディプロマ・プログラム）も導入されています。これにより、海外大学はもちろん、国内難関大学への進学にも有利です。

取材後記

取材前、「インターナショナル教育」はどこか自分には縁遠いものだと思っていました。でも、教室に足を踏み入れた瞬間、その先入観は見事に覆されました。英語の歌を全身で楽しむ子どもたち、1日の終わりに仲間の頑張りを称え合うリフレクションの時間、誰に言われるでもなく自律的に動く姿。「英語はあくまでもツール。それよりも、思考力や人をケアできる力を育てることが大切」というライナード先生の言葉通り、この教室で育つのは英語力だけではありません。

サレジアン国際学園小学校インターナショナルクラスには、まさにこれからの時代を生きるわが子に授けたい「ブレない21世紀型教育の軸」がありました。温かい教育愛に溢れた、子どもたちの未来が本当に楽しみになる学校です。

ライター：金子 茉由

早稲田大学教育学部卒。大学在学中より学生Webライターとして数々の学校訪問記を寄稿。新卒で入社し約15年勤めた大手人材会社では、学生向けキャリア支援事業に従事したのち、企業向け教育研修事業の立ち上げおよび企画営業の責任者を務める。現在は教育系、人材系のフリーライターとして活動中。小学3年生男児の母。

